

ニューギニア高地人

文／本多勝一 写真／藤木高嶺
ニューギニア高地人

朝日新聞社

■ 本多勝一（ほんだ・かついち）

1933年長野県に生れる。朝日新聞東京本社社会部員。著書に「知られざるヒマラヤ」（角川書店）、「カナダ・エスキモー」（朝日新聞社）、「きたぐにの動物たち」（角川新書）などがある。

■ 藤木高嶺（ふじき・たかね）

1926年兵庫県に生れる。朝日新聞大阪本社写真部員。日本山岳会員。ベルー山岳会名誉会員。スペイン国立登山学校名誉教授。著書に「インディオの秘境」（明文堂）がある。

ニューギニア高地人

著者／本多勝一・藤木高嶺

380円

昭和39年10月30日第1刷発行／発行者朝日新聞社浜名
二正／印刷所大日本印刷／発行所 東京・北九州 朝日新聞社
大阪・名古屋

© 1964 K. Honda & T. Fujiki.

Printed in Japan

ニューギニア高地人 目次

意外なジャングル

この人々……………九

意外なジャングル……………二

ウギンバ村のウギンバ部落……………六

モニ族とダニ族……………〇

アマカネ……………五

ゴサガ（ベニス・ケース）……………九

“ウギンバ病院”……………三

モニ族の簡素で家庭的な生活

ヤゲンブラ家……………三

マツチの有難味に関する疑問……………七

容器のない生活……………五

現地食主義の挫折……………七

塩作りの知恵……………六

イモと生肉の差……………三

味に対する構え	六
指なしばあさんは語る	七
ハチの巣狩り	七
宝貝の通貨	八
棒一本だけの農具	八
一夫多妻における妻の側の心	八
“服装”を交換してみると	九
石器時代も案外不便なものではない	九
石器時代の最後	九
石斧の切れ味	九
純石器時代を求めて	一〇
石器時代も案外不便なものではない	一〇
アヤニ族とナツソウ山脈横断の旅へ	一〇
アヤニ族の交易隊	一五
ザシガへの道	二〇

耐寒力の問題……………一三

赤道下の亜寒帯……………二九

悲しきニューギニア……………三三

雨の大高原……………三六

植物の恐怖……………四〇

迷い込んだ部落……………四四

ニューギニア高地人に襲われた日本軍

「ヒト食い人種」か？……………四九

襲われた日本軍……………六二

ダニ族の団体生活と奇妙な男たち

「男の家」と「女の家」……………七三

団体生活……………七七

社会形態に影響される個人の性格……………八〇

コーラスとヨーデルの文化……………八六

酒とタバコ……………九三

オシヤレと流行の原理……………一五五

美人投票は成立しない……………一九九

ブタと共に寝る奥様の生活と意見……………二〇三

ホモ・ルーデンス

誇り高き人々……………二〇七

対立……………二〇九

戦争……………二一四

葬式……………二一八

墓場……………二二二

ホモ・ルーデンス……………二二四

原始生活の幸福感……………二二九

ザロガ姉妹……………二三三

あとがき……………二三八

△付Ⅴ ニューギニア高地民の文化の位置（石毛直道）……………二四七

△付Ⅵ ニューギニア高地人合唱曲集……………二五一

■ モニ族

ヤ	ゲ	ン	ブ	ラ	50	ウギンバ村の実力者の中でも、比較的能力が目立つモニ族の長老。妻は三人いるが、ウギンバ部落で常と同棲しているのは一人。私たちと特に親交があった。	
ペ	ロ	ミ	ナ	35	ヤゲンブラの第一夫人。ウギンバ部落に常住。		
ザ	ロ	ガ	12	ヤゲンブラとペロミナの娘。			
パ	ー	ミ	ン	ナ	7	右に同じ。ザロガの妹。	
ボ	グ	ワ	4	ヤゲンブラとペロミナの息子。パーミンナの弟。			
コ	ボ	マ	50	実力者の一人。ウギンバ村ブナバ部落に住む。妻三人のうち一人は死亡。ヤゲンブラに次いで、私たちと親交があった。			
ユ	ガ	オ	マ	マ	ラ	15	コボマと、死亡した第一夫人の息子。ビガロレの親友。
ド	レ	ク	ワ	40	実力者の一人。ウギンバ村ミギレタカ部落に住む。		
ビ	ガ	ロ	レ	15	ドレクワの息子。ユガオママラの親友。		
タ	ー	ク	ン	バ	50	やもめ暮らしの女。指を八本切断している。	

■ダニ族（カッコ内は本名）

悪役（ビリギルワラ） 30

ウギンバ村ウギンバ部落に住む。不気味だがヒトは良い。

ナ ゴ ヌ 8

ビリギルワラと、死亡した先妻の息子。歌が好き。私たちの助手役。

憂鬱症（ミミリンガ） 40

常に憂鬱な顔をしている。妻二人。

皮膚病（カレング） 55

第五性病？の疑いもある。実力者の一人。

カヨガメンデ 40

ウギンバ部落のダニ族の最高実力者。妻二人。

オバケ（デガーム） 18

ナゴヌと共に、私たちの助手役。独身。以上六人はいずれもウギンバ部落の住人。

ゼンベチュイ 40

ウギンバ村ワニブギ部落の実力者。

女親分（アロメ） 40

指を六本切断しているワニブギ部落の女。

■アヤニ族

サ マ ノ ケ 40

アヤニ族の中で最も親交があつたが、ナッソウ山脈越えの時は一しよでなかつた。

ビーディア 30

ナッソウ山脈越えの同行者の一人。一番オシャレで、一番純朴。

意外なジャングル

この人々

「クロンボ」ということばがある。「ドジン」(主人ともいう。同時に「ヒトクイジンシュ」ということばが、それに結びつく。しかもこういうことばは、小学校にはいるかはいらなくらいの子どもでも知っている。今のおとなたちも、そのころから知っていた。おそらくこれは、マンガの影響だろうと思う。どこか南の国のジャングル。探検家がヘルメットをかぶって勇ましく進む。やがてきこえる不気味なタイコの音。どこからかとんでくる毒矢。たちまち探検家は「クロンボ」につかまる。しばらく探検家のまわりを踊り狂う「ヒトクイジンシュ」の群れ……。こういうイメージの中で、私たちは「クロンボ」に関する最初の「知識」を得る。その知識は、大部分の者にとっては生涯の変らぬ知識である。

この本のカラー写真の、第一ページを改めて見ていただきたい。チョコレート色の皮膚。どぎつい模様をぬりたくった顔。鼻に穴をあけて突きさしたヒクイドリのツメ。男性の象徴そのものを除けば、全

裸の姿……。たとえばこんな男たちが弓矢を持って現われ、ものすごい形相で笑ったでしょう。私たちの頭には、直ちにひとつの言葉がひらめく。——「ヒト食い人種！」

去年（一九六三年）の二月一七日。西イリアン（旧オランダ領ニューギニア）の北海岸にあるナビレから、カトリック教会専属のセスナ機を利用して、内陸高地の一拠点エナロタリに飛んだとき、私たちの小さな飛行機をとりかこんだのは、このような人々だ。日本人とは、共通点のあまりにも少なすぎる形相と挙動。いったい何を考えているのか——歓迎しているのか、何かたくらんでいるのか、心の読みとりようもない表情。

この七カ月ほど前、カナダの北極圏でエスキモーたちと初めて対面した際、私は何の不安も感じなかった。日本人とよく似たかれらの顔が笑うとき、それは笑顔以外の何ものでもなかった。かれらの感情が、そのままこちらに伝わってくるように思われた。が、ここでは逆だ。暗色の顔が白い歯をみせて笑うとき、笑顔であることには違いないが、私たちの不安を一そうつのらせる。

ヒト食い人種。「ニューギニア」と言えば、すぐに「ヒト食い人種」とこだまが返る。事実、ニューギニアのヒト食い人種をうたい文句にした本が内外に多い。そういう「人種」の部落で、私たちは生活してきた。なぜ、かれらに食われないで無事に生還できたのだろうか。

カラー写真の第一ページにあげた二人の男たちは、全ニューギニアで一番高いナッソウ山脈の南側、ザシガ部落に住むアヤニ族である。一方、私たちが住んだウギンバ部落は、山脈の北側にある。この写

真の男たちを含めて一〇人のアヤニ族は、標高四三〇〇メートル前後の峠^{とうげ}を越え、山脈を横断して北側へ交易にやってきた。かれらがザシガへ帰るとき、藤木カメラマンと私とは、かれらに従って山を越えた。護衛の兵隊はもちろん、武器の類など一切もたず、かれらと共にジャングルを歩き、かれらと共に岩かげでゴロ寝をしては夜を明かした。

それでも私たちは殺されずに帰ってきた。私たちの肉がマズイと思われたからでもなければ、文明の余波が山奥まで及んだわけでもない。理由はひとつだけ。——私たちが人間であるのと同じ程度に、かれらも人間だったからである。

かれらは、どのように「私たちと同じ人間」だったのか。それを、これから語っていかうと思う。探検隊がエナロタリを出発したのは一二月二三日。クリスマス・イブは、ウィッセル湖にそそぐアラブ川をボートでさかのぼれる限りつめたところで迎えた。

意外なジャングル

『ニューギニア奥地の放浪』という本 (Wanderings in the Interior of New Guinea) がある。J・A・ローソンという人が、約九〇年前にロンドンから出版した。その中に出てくる記録によると——

エトナ山^(三二七四メートル、イタリヤにある欧州最高の活火山)より一〇〇〇メートル以上高い活火山があり、幅約三〇〇メートルでナイヤガラよりも高い滝があり、エベレストより一〇二六・五メートル高い世界最高峰がある。エベレ



内陸のジャングルの内部
(コモバーホメヨ間の峠付近)

トトルもの太さの巨木。インドのトラよりも大きくて、
こういうメチャメチャな本が、わずか九〇年前に平然と出版できるほど、
ニューギニアは最近まで未知の国だった。約八〇年前には、フランスの一詐欺師^{さぎし}にだまされた一〇〇〇人余りの植民者が、フランス、ベルギー、イタリア、スペインの各国から集められ、地上の楽園のように宣伝されたニューギニア

ストはヒマラヤの連山の中でほとんど姿を没していて目立たないのに、この山は雪をいたいた雄姿が群を抜いてそそり立つ大独立峰だ。ローソンはこれに「ハーキュレス山」と命名し、九時間で七五九メートルの高さまで登ったが、耳や鼻から血が出てきたので、力つきて敗退した。ヒマワリほどもある花の三色スミレがあるし、大ザラくらいあるクモもいる。長さ三〇センチ近いサソリ。黒い葉のシダ。絹のような長いタテガミのシカ。ふれると数時間も芳香がとれない巨大な赤いユリ。アメリカ野牛に似たウシ。人間そっくりの巨大な類人猿。周開二五メ

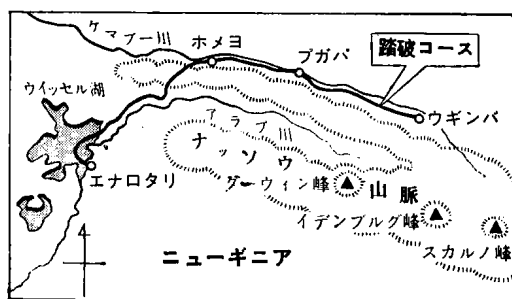
めざして、四隻の船で送られた。行きついた「黄金郷」は、ニューギニアの中でも特に最悪の土地だった。無事にここから逃げ帰った者は七〇人たらずしかいなかったと伝えられている。

だが、現代の私たちは、かれらを笑うほどニューギニアを知っているだろうか。日本軍の占領は主として海岸付近に限られ、しかもメラウケなど南岸の大部分は占領されないうちに敗戦を迎えている。私たちのニューギニア行は突然だったために、予備調査の余裕がほとんどなかった。ジャングル。底なしの泥沼。マラリア。酷暑。猛獣毒蛇。そしてヒト食い人種……。ニューギニアについて私たちが漠然と浮かべるイメージは、まずこんな情けない程度でしかなかった。

アラブ川をのぼりつめてポートを捨てると、いよいよニューギニア山地の行進が始まる。探検隊は、日本側が一〇人。インドネシア側が約四〇人。ほかにインドネシア特攻隊の護衛兵一〇人。エナロタリでポーターとしてやとったカポーク族の現地人は無慮一〇〇人。あわせて百数十人が、それぞれの歩調で勝手に歩く。

南緯三度五〇分。標高約一八〇〇メートル。アラブ川ぞいの谷には、カポーク族の部落が点々と続く。大部隊の通過を、ぶったまげて見送るハダカの村人たち。男という男は、片手に弓矢を持っている。その一人一人に、私たちは「コヤ・トウ」（こんにちは）と、カポーク語のあいさつを贈る。かれらも一せいに答える——「コヤ・ウイ・トワン」（こんにちは、だんを）。

出発して四日目。道はアラブ川の本流ぞいから離れ、標高二千数百メートルの山脈の横断にかかる。



ジャングルの細道を三日間。原住民の通るこの細道は、決して「想像を絶する悪路」ではない。日本アルプスあたりの、やや人通りの少ない登山道程度。悲壮な覚悟で来た者には、むしろ期待はそれでさえある。ただしこの山道は、日本の場合のようなジグザグ・コースをとらない。どんな急坂でも、まっすぐに上り、まっすぐに下る。

ときどきは泥沼のような部分もある。が、たいていの場合、その周辺部を歩けば、キャブバン・シュエーズが泥に埋まってしまうほどのことはない。雨も毎日のように降る。しかしこれも、たいていは午後か夜に一度、二、三時間やってくるだけ。雨ガッパとコウモリがさどがあれば、たいては苦にもならない。これは今が特別の季節だからというわけではない。広いニューギニアは、地方によって気候がかなり違うが、西イリアン中央高地の場合、季節による大きな変化は認められないことが明らかにされている。

ジャングル。確かに昼なお暗く巨木が空をおおっている。しかし道のない原始林でも、オノやナタでバッサバッサと切り開かなければ通れないようなところは少ない。川すじにそった部分には、空間がなほ草木が茂り、ツル草やら寄生木やらが、三重四重にからみ合っているところもある。記録映画などは、こういう所ばかり写してきて観客を仰天させる。しかし全体として、たとえば北海道の山のよう